

ある 歩 け 泰 治

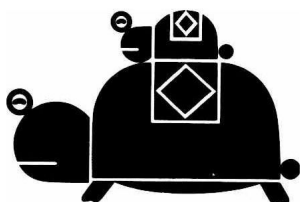
文・原田武雄 絵・原田泰治



ある たいじ
歩け泰治

定価 1200円

昭和61年 5 月28日 第 1 刷発行



著 者 原田武雄 原田泰治

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号112

電話 東京03(945)1111(大代表)

印刷所 中央印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

© Takeo Harada & Taiji Harada 1986 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえします。

ISBN4-06-202740-2 (0) (美B)

188351



日文 701690329

歩^{ある}け泰^{たい}治^じ

文・原田武雄

絵・原田泰治



講談社

もくじ

一、泰治の幼年時代

泰治の誕生	7
泰治の足が動かない！	8
治療の明け暮れ	9
生母・春恵の死	12
新しい母・か津み	16
泰治が立ちあがった！	22
百姓になることを決心	25

二、伊賀良村での少年時代

家族で伊賀良村へ移る	29
太平洋戦争おわる	31
ドンド焼き	32
小学校入学	41
足の骨を折る	44

三、泰治の中学・高校時代

遠足	54
陸稻づくりの失敗	57
杖なしで歩く泰治	60
水を求めて横穴を掘る	68
続・杖なしで歩く泰治	74
米づくり	82
平凡ながら幸せな一家	85
小学校の修学旅行	90

泰治の中学・高校時代	93
中学校に入学	101
八年ぶりに諏訪に行く	102
再び諏訪に移り住むことを考える	103
「豊光堂看板店」を再開	107
泰治の二度めの危機	109

一家で諏訪市に移り住む……………113

反抗する泰治……………115

上町のもとの家にもどる……………120

第二の足……………121

中学校修学旅行……………125

高校進学……………128

足を手術……………130

再び、ひとり歩きができる泰治……………132

デザイナーになることを決意……………136

四、 泰治、上京……………139

大学への道……………140

大学でデザインを学ぶ……………144

兄の幸治が結婚して家業をつぐ……………145

大学生時代……………146

就職と縁談のこと……………147

五、 泰治のひとりだち……………153

泰治の社会人第一歩……………154

個展を諏訪で開く……………155

グラフィックデザイナー、原田泰治の

誕生……………159

泰治と治子さんの結婚……………162

“HOKODO DESIGN

STUDIO”を開設……………164

イラストレーター、原田泰治の誕生……………165

ますますひろがる仕事……………171

歩け泰治……………174

あとがき……………177

装
幀

原田泰治

一、
泰治^{たいじ}の
幼年^{ようねん}時^じ代^{だい}

泰治の誕生

一九四〇（昭和十五年）年四月二十九日のことでした。

この日は天皇誕生日で、当時は「天長節」とよばれていました。長女・好子の通う小学校で、その祝賀式が行われているまっさいちゅうの午前九時半、わが家では妻の春恵が、四人めの子を出産しました。

このめでたい日に、しかも男の子の誕生です。私はこの子が豊かで安らかに育つてくれるようにという親の願いをこめて、「泰治」と名前をつけました。

当時、私は四十四歳、長野県諏訪市の上町というところで、「豊光堂」という看板店を営んでいました。

妻の春恵は三十三歳でした。子どもたちは、十三歳の長女好子を頭に次女充子四歳、長男幸治二歳、そして生まれたばかりの泰治を加えて、一家は六人になりました。

日本は、一九三七（昭和十二年）年に中国で戦争をはじめていましたし、昭和十四年には

ヨーロッパで第二次世界大戦の火ぶたが切つて落とされ、一步一步暗闇のなかに踏みこんでいくような不安な気配が流れていました。

西洋風の言葉を使つてはいけなさとされ、学校の音楽の授業でも、「ドレミファソラシド」は「ハニホヘトイロハ」になっていました。戦争のえいきょうで、生活物資がどんどん乏しくなつてきて、節約や倭約がさげばれ、たとえば泰治の生まれた年には、

「マツチは一人一日五本まで」

などと制限されたのでした。

そんな時代でしたが、わが家にはまだ暮らしにこまらないだけの蓄えもあつて、子どもたちにはこれといった不自由をさせることもなく、毎日を過ごしていました。

泰治の足が動かない！

翌一九四一（昭和十六）年。泰治は、一歳の誕生日をむかえる一か月くらい前から、ヨチヨチ歩きができるようになりました。そして、姉や兄たちともいっしょに遊べるように

なつて、日ごとにかわいらしい動きがましてきていました。

ところが、五月十六日の朝のことです。泰治のおむつをかえていた春恵が、とつぜん、「とうちゃん、たいへんだ！」

と、さけびました。看板描きの仕事をしていた私は、その声を聞いて反射的に絵筆を投げだして、春恵のところにかけつけ、妻の肩ごしに泰治をのぞきこみました。

泰治の顔はまっ青になって、おびえた目が天井の一点を見つめたまま動きません。両足は硬直してしまつて、まるで棒のようです。

「しまった」

と、私はさけびました。それは私にもそれとわかる小児麻痺の症状だったからです。

この病氣は、手足がぶらぶらになったり、硬くつっぱたりするもので、五歳くらいまでの子どもがよくかかるのです。

大急ぎで、近所の病院にかけつけて、往診をお願いしました。
診察をおえた先生はいいました。

「もう手後れですね」

泰治は、もうこれから立つて歩くことができなくなる、そればかりか、麻痺は全身におよぶかもしれないとまでいうのです。

春恵は、横になっている泰治の上におおいかぶさって、抱えこむような姿勢になったまま、ただ、おろおろするばかりです。

この日からわが家のふんいきは、一転してしまいました。はしやぎまわっていた子どもたちの笑い声はすっかり消えて、救いようのない重く暗い空気が、家全体をおしつづむのでした。

とつぜん泰治を襲ったこの不幸について、私と春恵は、どういう処置をとればいいのか、もしなおらないとすれば、この先泰治をどう育てていけばよいのかと、くる日もくる日も悩み考えこむのでした。

姉の好子や充子、それに兄の幸治も、とまどい苦悩する私たちの姿を見て、弟の泰治の身におこった不幸の重大さを、なんとなく感じとったのでしよう。三人ともいつもの元氣

はどこへやら、すっかりしよげて、親と目をあわせるのをさけるように部屋のすみにかたまって、心配そうな表情でうずくまっているのでした。

ある日、近所の人が、自分の家に来ている祈禱師を、わが家にさしむけてくれました。怪しげなかつこうをした行者が、泰治の枕もとで祈禱をはじめました。春恵は、わけのわからぬ呪文を唱える行者に手をあわせてぬかずいています。

その姿はあまりにも痛々しく、たまりかねた私は、祈禱を中断して帰ってもらいました。たとえ迷信であろうが、泰治の病気がなおってくれるのならという気持ちには、私にもありませんでした。しかし、それは一時の気やすめにすぎず、そんな方法で泰治の病気がよくなるはずはないのです。

治療の明け暮れ

春恵は、泰治を背負って病院に通いはじめました。病院の先生からは、はっきりとし

た治療効果は望めないといわれましたが、脊髄注射を毎日打ってもらうことにしたのです。

春恵は、たとえむだでも、毎日通わずにはいられなかったのです。そればかりか、超音波を使った「アコマ」という治療器を買ってきて泰治の足にあててみたり、近所のマッサージ師にもんでももらったり、温泉療法を試みたりもしました。とにかく、耳にした治療でできることは何でも、手あたりしだいに試してみるのでした。

こうした春恵の姿は、まさに「溺れる者、藁をもつかむ」の言葉どおりでした。春恵にしてみれば、どんな治療であれ、試しているそのときだけが、心が救われる唯一の時間だったでしょう。

そんな毎日が四、五か月つづいたある日のことです。

泰治が寝返りをうちました。

「泰治が寝返りをうった」

言葉にすれば、ただそれだけのことですが、私たちにとっては大変なことです。両足が完全に麻痺してから、身動き一つできなかった泰治が、はじめて、自分自身の力で動いたの

です。

私はすぐに泰治を背負って病院にかけつけました。

私の話を聞きながら、診察をしてくれた先生は、泰治の左足にかすかな反応があることを認め、

「左足の麻痺が快方にむかっています。左足に力が入るようになったので、寝返りがうてたのでしょう」

と、話してくれました。

これまでの治療の効果でしょうか、それとも私たちの願いがかなって奇跡がおこったのでしょうか。

左足だけでも麻痺からさめてくれたら、なんとか立って歩ける方法が見つかるかもしれません。

泰治を背負って病院を出た私は、

「泰治の足は生きていたゾ。すこしずつよくなっているのだ……ゾ」

と、大声でさけびながらとびはねて帰りたいおもいでした。

寝返りがうてるようになった泰治は、そのつぎには手を使って這えるようになりました。動かない足を引きずりながらのハイハイですから、手にかかる負担はさぞかし大変だったにちがひありません。

泰治は、うつぶせになって両腕の肘をまげ、それを交互に前に送り出して、満身の力をその腕にこめて、全身を引っばって行くのです。

その姿を見て、春恵は、

「泰治は足のわるいぶんだけ、神さまが手に力をあたえてくれたのでは……」
と、語るのです。

すこし這っては、あどけない笑顔で私たちを見あげる泰治の姿は、足が硬くこわばった絶望的な発作状態のときと比べれば「月とすっぽん」雲泥の差です。それは、きびしい冬の雪の下で、やがて訪れる春に望みをたくしてふくらみつつづけている小さな草の芽のようでした。